令和元年度　第２回　埼玉県生涯学習審議会　会議録

１　日　時　　令和２年２月６日（木）１５：１５～１６：１５

２　会　場　　埼玉会館　会議室６Ｂ

３　出席した委員　（１３人）

生駒章子委員、猪股敏裕委員、井深道子委員、柿沼トミ子委員、加藤聡司委員、坂口緑委員、髙澤守委員、寺山昌文委員、長坂道子委員、西村平雪委員、芳賀洋子委員、又野亜希子委員、和田明広委員

４　欠席した委員　（７人）

青山鉄兵委員、有田るみ子委員、大矢美香委員、小川直己委員、風間重文委員、田辺直也委員、松澤正委員

５　議事の経過

（１）会長の開会宣言

（２）会議の公開・非公開

会長が会議の公開・非公開を委員に諮り、公開とする。

傍聴者なし

（３）会議録署名委員の指名

会長から髙澤委員と寺山委員が指名された。

（４）議題及び経過

ア　議題

（１）人生１００年時代を見据えた学び直しとその成果の生かし方

イ　経過

人生１００年時代を見据えた学び直しとその成果の生かし方について

事務局

前回は「学び直し」について、漠然と大きな議題について議論いただいた。

文科省の学び直しの意識調査でも「学び直しの理由」として「教養を深めるため」「今後の人生を有意義にするため」と回答された割合が多く、約５割。

人生100年時代において、「教育を受け、定年まで働き、老後を送る」という単線型の人生ではなく、一人一人が違った働き方を見出し、自分なりの人生を追い求めることが考えられる。

起業や就業のためだけでなく、人生をより豊かなものにするためにも「学び直し」が必要になってくると考える。

前回の会議でも、

・看護師や医療経験がある人のボランティアとしての学び直し

・実践しながら学ぶというのも学び直し

・学習した成果を生かしそれが次の学びを生む

などのように、学び直した後に、その成果を活用できることが必要との意見を多くいただいた。

前回報告したように、県や市町村の事業において「学び直しの仕組みづくり」の事業に対して「学んだ成果を生かす仕組みづくり」の事業は約半数という結果であった。

そこで、今回は、人生100年時代を見据えた「学び直し」のために、「学び直しとその成果を生かすために県が取り組むこと」について議論いただきたい。

今回は特に、高齢期の学び直しとその成果を生かす場についてご議論いただきたい。

学びを生かす例として、資料２で示すが、公民館のサークル活動で学んだことを学校での子供支援に生かしている例である。

具体的には、サークルの方々が子供たちとの交流の機会を設けるため、学校と連携して、学校の空き教室で活動しているものである。

空き教室で活動することで、休み時間に子供たちが訪れ、囲碁や将棋を一緒に行ったり、さらに、クラブ活動の支援も行ったりしている。

公民館と学校が連携することによって、高齢者がサークル活動で学

んだことを学校の場で生かすといった循環ができるという事例である。

このような活用の場をそれぞれの委員の皆様からご意見をいただきたい。

会長　前回の会議を整理したところ、何かを勉強しなおすという訳でなく、「学び直し」というのは、学んだ後の成果をどう活用するのかということが重要であるということが分かったということである。

では、それをどのように展開できるかということについてご意見をいただきたいということである。

すばらしい事例もいただきました。それとはまったく違った視点でも結構ですので、生かす場としてどのようなことを想定すればよいのか、そして県としてどのような支援ができればいいかについてご議論いただきたい。

委員　以前、ユニセフの日野原先生が１０２歳の時に「この頃俳句を始めた」と言っていて、いつから始めたか伺ったところ、「９８歳からだ」といっていた。それを聞いて、学び直しについて期限はないんだと感じた。

地元では、１０歳の子供に地元の歴史を教えている。高齢者が学び直して「地元の子供に伝えていく」という生かし方がある。

また、郷土料理等を教えようとしても、教えていくためには再度学ぶことも必要である。学んだ成果として地域に伝達していくということも必要であると考える。

会長　具体的な事例をありがとうございます。仕組みなどについてご意見いただいてもよい。いかがか。

委員　学童や、放課後子供教室の「ふれあい学校」でお絵かき教室の方を招いている。また、俳句等を学校教育の中に取り入れていくことを考えていたところ、コミュニティ・スクールの委員から句会の先生を紹介いただき、授業の中でご指導いただいた。そこから発展し、句会の皆さんにも来ていただけるような流れになった。学校だけで子供の教育を行うのではなく、地域の方の力を借りていくことも大切である。学校とのつながりを求めていくことも大切。

会長　学びのグループがある。学びの成果を生かすためにも学びのグループは必要。学習の場を作っていくのは、本来公民館の役割。
どんな支援や仕組みがあればよいか、後押しがあればよいか。

委員　年代を問わず、ユーチューブを見ている。例えば、学びでICTを使って、高齢者チャンネルを作り、ユーチューブで発信するなどもよいのではないか。そのために、高齢者のためのユーチューブ講座を行うなどもおもしろい。

委員　人材バンクを市町村で作っている。おやじの会等もニーズに応じて子供たちに教えている。女性も男性も関係なく高齢者も生きがいとなっている。退職して会社人間から地域人間になった人にも声をかけ、地域に出てもらいことも大切。孤立化も防げる。

会長　ほかにいかがか。

委員　私たちが県に望むことは、ジョイントである。どこにどのような資源があるか。どこに住んでいても県民が学びを受けられるようにしてほしい。また、働くためだけでなく地域の人間として、学べるように教育局だけでなく他部局とも連携して、市町村を導くリーダーシップをとって頂きたい。

委員　図書館では、ほぼ毎日高齢者の方、特に男性のリタイアされた方の利用が多い。毎日図書館を利用する人もいる。図書館にもメニューはたくさんある。目的意識が高い人がサークル等を行っている。それぞれの価値観の問題である。生活の場を生かす。行政は、多くのメニューを用意する必要がある。ICTを高齢者が使いこなすことも考えられる。学びの成果を生かす方法や表現には色々ある。例えば、学びの成果を地域貢献に生かす人もいれば、地域貢献に生かすことをゴールにしていない人もいる。

委員　地域課題と向き合うのも社会教育だと思う。「最初から社会貢献しなさい」というのは、嫌な人もいる。「学んだ成果を生かすこと」が先に来なくても学んでいることの意味付けは後からでも良い。町レベルでは、色々なことをやっている。社会人だと将来の社会保障制度等、

そういう選択ができたら良いという「地域の仕組み」があると良い。

会長　今までの委員の意見から、学び直しとは、「県民誰もが学ぶ」とか「社会貢献がゴール」でもない。「地域参画」だけではない。生涯学習はハードルが低いことがよさ。ちょっと学んでみようと思って学べることが大切。「高齢期のいきがい」とか広い意味で「県民誰でも」学べるという捉え方が大切。そこに行くには何が足りないのだろうか。

委員　高齢者大学は色々なところで行っている。その学びのなかから、「お茶の先生になろう」とう方もいる。社会人のなかでも、多彩な能力があるが、能力を生かす場がない。「こういうツール、方法を通して」というのがあれば、新しい人生が始まる。地域は、組織ではないので、上下の関係もなくフラットな関係である。人生１００年時代のなかで、どうやったら「Leave no one behind」を実現していくか提示していくことも大切である。

会長　学び直しには、フィールドの広さを示すことも重要である。サービスグラントというところが行っている「プロボノ」というものがある。社会人として培ってきて技能をそのまま生かす仕組みであるが、支援する期間は３～６カ月。自分にとって合わなければやめることもできる。こういった自分の力を生かす仕組みが高齢者でうまくいったことがない。「力を生かしたい」と「生かせる場がある」ことはイコールではない。

委員　自分自身も、定年になるが「自分は何ができるのだろう、埋没して草刈りして終わる。自分の特技や才能が生かせる情報がないと本当に社会から取り残されることになってしまう。」と思ってしまう。情報弱者に対するサポートは必要である。

会長　退職した方が地域にどうやってもどるか。誰もが不安である。高齢者大学も知っているが行けるかどうかは疑問である。「私は何ができるのだろうか」というニーズに答えていくことも大切である。大企業では退職へ向けての研修を実施し、ソフトランディングできるようにしているところもある。

委員　地域の方に声をかけると出てくることもある。声をかけてくれる人の人柄を知ることで、「やってみよう」という気持ちも出てくる。また、「遠慮がち」であるが、慣れてくると引き受けてくれる人も出てくる。

退職後は、どうしても行動範囲が狭くなる。孤立して生きるよりは、地域の人に「挨拶」し、「地域の一員として活躍」した方が良い。地域社会の資源として退職後も自分の特技を生かし頂きたい。特に男性は、声をかけてもらうことで、地域で新しい世界が開かれることも多い。

委員　経済界で長くやっているが、高齢者が成果を生かす場が見つからない。確かに高齢者には、「市民大学」、「健康体操」、「サークル」、「ハイキング」等自分が楽しむ世界しか教えない。大切なのは、「自分の経験をどう生かすか」というものがない。ボランティア、学習支援、ひきこもりの子供を引っ張り出す等その方の活動としては良い。「成果を還元する場が見つからない」ので、社会貢献できる環境づくりが大切なのだと思う。

会長　今までの議論をまとめると「情報がいきわたっていない」「声をかける人を増やす」「今の時代にあったメニューを考える」が大切ということでしょうか。

委員　今は破壊と創造。昔のことを伝えることが良いのか疑問に思うことがある。教員の再任用に関してもあまり良いとは思えない。昔の方法では、現在の教育現場はもう対処できない。問題が複雑化し、生徒指導も様々な問題が起きている。一方で、自分たち経営者が苦労してきている経験談を子供たちに先人の知恵として話すことは可能である。

委員　最後は家庭なのか思う。地位があった方も退職し、家庭に戻る。

料理や様々な学びも最後は家庭で出せればいいのかなと思う。

会長　県の事業としては、色々なレベルの活動があるので、多様性を担保しながら、自分が楽しむだけでなく社会に学びの成果を還元させる。そのためには、今日の議論では、一つに高齢者大学のバージョンアップが必要なのかもしれない。

委員　公民館サークルが学校に行くことはいくつか課題もある。誰もが指導者になるのではなく、地域で気軽に話せる大人が増えることはいいと思う。

また、高齢者大学の中で自主グループを作り、県が地域とつなぐのが理想である。

委員　社会教育関東甲信越のシンポジウムにて「人生１００年時代の学び直し」について議論があったが、当然結論はでない。今現在の平均寿命から２０年は長くなる。人生が２０年延びるとなると、心の豊かさが増えれば良い。

会長　たくさんのご意見をいただいた。事務局には次回の会議に向け、しっかりとおまとめいただきたい。

事務局　いろいろなご意見をいただきありがとうございました。皆さんのご意見を聞き、それをまとめて公表していきたいと考えている。いただいたアイデアを公民館等で実践していただくことも可能かと考えている。

次回は、障害者の方の学び直しについてご議論いただきたいと考えている。

会長　本日の議事は以上で終了する。